# 第十　宗教と哲學との關係

宗教と哲學との關係を論せんには先づ哲學の何ものなるかを知らざるべからず

哲學の定義に關しては各哲學者の所說殆んど一致せず皆自家の立脚點より說き去るが故に先天論者の定義は後天論者に異り唯心論者の所說は唯物論者に異り批評哲學の解釋は懷疑哲學に異れりされど此篇の目的は諸大哲學者の意見を列擧して其得失を論せんとするにあらざるを以て是等の事は專門家の所說に一任して吾人は唯一般の見解に從ひて哲學の定義と範圍とを定めんと欲す

たとひ哲學組織の異なるに從ひて其定義を異にするにせよ大體哲學てふ名稱を以て是等一切を包含し得べしとせば哲學の何たるを定むる難きにあらざるべき乎哲學者の議論は寧ろ精細的確ならんとするなり吾人はたゞ其一般を知り得ば則ち足らん吾人は哲學を定義して



宇宙の最大原則を研究するものとなす

蓋し宇宙を以て秩然たる理法の發現せるものとなすは諸科學の基礎なり諸科學の存在し得る所以は則ち實に宇宙(コスモス)の整々として一糸亂れざるを證す若し萬物の間に何の理法も之れなしとせば科學は何の爲に存在せんとする乎組織的に萬化を研究すと云ふも組織なき萬化は到底手を着くるに所ならん而して諸般の科學が各其範圍內における理法を探究する如く是等の理法を統一し調和する所の一大原理を討究する學問之を哲學と曰ふ

宇宙を統制する一大原理或は第一義諦と曰ふべく或は絕對と曰ふべく或は想と曰ふべく或は意と曰ふべく或は實體と曰ふべく或は無意識と曰ふべく或は靈と曰ふべく或は神と曰ふべく或は不可知と曰ふべく或は道と曰ふべく或は眞如と曰ふべし其名稱の如何其性質の如何は哲學者の所見に由りて千種萬樣なるべしと雖這一物を以て宇宙

一切の現象の由て起る所以となすに至りては皆相一致せざるを得ず或は哲學なるものなしと曰はんか是亦其人の哲學たるを妨げず何となれば彼亦これに因りて宇宙を説明せんとすればなり

故に哲學は科學の上に建立せらるゝものと謂ふべし其目的とする所は科學の研究に由りて得たる諸般の理法を調和し統一して以て宇宙全體を支配する一大眞理に到達せんとするに在り植物界の現象を研究する之を植物學と謂ひ礦物界の現象を研究する之を礦物學と謂ひ動物界の現象を研究する之を動物學と謂ひ人心活動の狀況を研究する之を心理學と謂ひ智識の原則を討尋する之を論理學と謂ひ自然及人爲の美の原則を探究する之を審美學と謂ひ乃至道德の事實を研究する之を倫理學と謂ふ而して是等諸般の科學が各其範圍内において研究したる結果即ち個々獨立の理法を更に概括して一科の研究法を立つ是即ち哲學なり西人或は哲學を呼びて科學中の科學又は科學の女王となすは之がため也



哲學にして果して上述の如しとせば其の宗教に關係する頗る密なりと謂ふべし何となれば宗教も亦哲學の如く吾人が宇宙に對する位地を感得し由て以て安身立命の田地に到らんとすればなり兩者は殆ど同一物の表裡に似たりとなすべきかされど尚精細なる觀察を下すときは哲學と宗教とは其目的を異にし其方法を別にするを見る請ふ之を辯せん

思ふに哲學の起因は寧ろ智の上に在り古人も人間は原因を討究する生物なりと曰へりし如く人智は諸般の現象を見聞して其まゝに止むものにあらず四時行はれ晝夜交代すれば其何の故に然るかを究めんと欲し生老病死の相往來するを見ては生何の所よりか來り死何の邊にか去るを知らんと欲し日月星辰爛然として大虛空に羅列し旋轉し

て暫くも休せざるを察すれば其如何にして斯くの如くなるを得る乎と疑ふ而して其研究欲たる一理を發見すれば更に之よりも大なるものを知らんと欲し歩一歩其絶巔に到りて路頭窮するにあらざれば已むことなし故に哲學は人智稍〻發達したるのちにあらざれば興起するなきに似たり原始の民族は動物を去る一歩に過ぎず饑ゑて食ひ飽きて眠る終生唯斯の如きのみ彼等に向つて宇宙の原則を説くは猶猫兒面前に黄金を撒するが如くならん

されど宗教に至りては哲學に先ちて發生す動物を崇め木石を拜し風伯水神を祭り諸天善神を尊ぶが如きは未だ哲學を有せざる蠻民の既に爲したる所なり蓋し宗教は大概情より發芽す而して情は智に先ちて動く固より哲學と雖吾人の安心を求めんため即ち情感の搖動より生ずる場合なきにあらざるべし原始時代の宗教は實に蠻民の哲學なりきと謂ふも不可なからん而かも文化の益〻進むに從ひて哲學は自ら



智を占領し宗教は自ら情と意とを所有するに至れり換言すれば哲學は之を理智の上に在りて研査討究するものとなり宗教は之を意と情との上に在りて實踐躬行するものとなりたる也

之を要するに哲學は眞理を知るに在り宗教は眞理に住するに在り哲學は懷疑的なり研究的なり宗教は信仰的なり感受的なり宗教は美術に喩ふべし哲學は審美學に喩ふべし宗教は秋夜庭中に立ちて明月の皎々たるを見金風の颯々たるを聞くに似たり哲學は司天臺に上り氣象臺に出でゝ月面の黑斑を觀察し秋雲の集散離合を測度するに似たり宗教は原文なり哲學は批評なり故に宗教家には如何にして此の如きの威嚴を有し此の如きの慈悲を有し此の如きの寂靜を得たるかと問はざるべからず而して哲學者には如何にして此の如きの組織を案出し此の如きの結論に到着せるかを問はざるべからず

乃ち知る哲學と宗教とは其目的を異にするものなるを哲學は論理の

調和を得ば滿足し宗教は情意の平和を得ば滿足す論理の矛盾なきは必ずしも情意の平和にあらず情意の迷悶せざるは必ずしも論理の調和にあらず宗教家をして其信ずる所を組織的に述べしめば彼或は矛盾の論法を用ひん哲學者をして其說く所を實地に躬行せしめば彼或は撞着したる言行をなすべし論理に矛盾あるも宗教家の宗教家たる所以は全し行爲の撞着ありと雖哲學者の哲學者たる所以に背かず然れども宗教家にして大信仰を缺き大慈悲を缺けば不完全なる宗教家と謂ふべく哲學者にして新組織なく新機軸なきは獨立特行の哲學者と謂ふべからず

然れども宗教家にして哲學者となるも亦可なるべく哲學者にして宗教家となるも亦可なるべし哲學者も其哲學に由りて自ら安身立命を得たりとせば是其宗教なり宗教者も其所信を論理的に編述せば是其哲學也故に基教には基教の教理を討究する神學あり佛教には佛教の



教義を研究したる論部あり之を呼びて基教哲學佛教哲學と曰ふ可なるが故に自ら世の所謂る哲學と其趣を異にせざるを得ず亦以て宗教の哲學に異なる所以を見るべし

或は哲學を以て宗教の理論となし宗教を以て哲學の應用となすものあり是亦不可なきに似たり蓋し哲學は哲學たるにて全きを得ず必ずや之を宗教に實踐せざるべからず宗教の目的なき哲學は跛者なり躄者なり眼は能く百歩の遠きを見れども一歩をも進むる能はず是尙可なりかの之がために却て心亂れ神狂ひて一生を悒々の間に送るが如きに至りては其哲學果して何の用ぞ哲學は決して宗教を離れて安きを保つものにあらずそれ人の智眼を拂拭して明ならしめんとするは智眼其ものゝ明を欲するのみにあらず亦將に其明眼を以て横行濶歩せんと欲する也若し横行濶歩は健脚の人に任す吾は唯眼の明かなる

を以て滿足すと曰ふものあらば是れ人生を以て實地的となさゞるもの目的と手段とを混じたるものにあらずや固より哲學の目的は智惠の光を發するに在るべし然れども哲學は人生を離れて存在するものにあらず徒らに高遠深玄の說を弄ぶも日用行住坐臥の間に在りて其力を現はす能はずんば哲學是れ何等の閑言長語ぞ畢竟するに哲學は宗教とならざるべからざる也

次に哲學と宗教とは其方法を異にせり哲學に在りては了知分別を以て眞理を知得せんとすれども宗教に在りては情波識涙を超ゑて直下に眞理を感得せんと欲す哲學は階に由り梯に由りて高處に上らんと欲し宗教は一足躍進して彼岸に到らんと欲す哲學は差別を經て平等に入らんと欲し宗教は平等を得て差別に出でんと欲す哲學は寧ろ歸納的なるべし宗教は當に演繹的なるべし哲學は紆餘九曲す宗教は驀直に向前す哲學は安然なれども迷ひ易く宗教は危險なれども悟り易し哲學は他より注入し得べからん宗教は各自に發明せんを要す哲學は學ぶべし宗教は悟るべし古今東西の哲學を暗誦せるものは巧に辯を弄して縱說橫說一たび之を聞けば皆自家の冥想に由りて得たるが如く思はしむるを得べし宗教に在りては決して暗誦記憶を許さず必ず自家の胸襟より流出し將ち來りて蓋天蓋地ならんを要す是宗教の哲學と異なる所以也



要するに宗教は人生の一大事實也而して哲學は之を說明す事實は曲ぐべからず蔽ふべからず說明は或は是なるべし或は非なるべし天地一貫の大道理あるは客觀的事實也猶吾人が花を見るとき實に其花なるを知るが如するは主觀的事實也而して宗教が之を內に省みて感得し哲學は之を了知分別の上に將ち來りて說明を附すべしされど宗教の活面目は其說明の上にあらざるは智者を待ちて後知らざる也說明は事實の反影なり反影をのみ之れ逐はゞ愈事實を去る遠きは自然の

理なるべし

されど吾人は宗教を以て哲學的に解釋し得べからずとなすものにあらず之を美術に喩へんに審美學は美の性質を説明し得べし勿論審美學は美術其ものにあらず神韻縹緲として一刀一畫の中に隱現する所以は審美學の解釋にて學び得べくもあらずと雖美を客觀的に主觀的に説明する一事はなし難きにあらざるべし

如上之を畧述するに哲學と宗教とは酷似せるが如しされど心理の上より見れば一は智に屬し一は情意に屬す其目的より曰へば一は安心立命に在り一は論理の調和統一に在り其手段より曰へば一は了知分別に由り一は直下に會得せよと教ふ而して一種の哲學者より見れば宗教は哲學の應用にして哲學は宗教の理論なるべし又宗教家より見れば哲學は説明に過ぎず宗教は事實なり哲學是か宗教是か蓋し閑名



字を爭ふは吾人の欲せざる所也

# 第十一　宗教と科學との關係

宗教と科學と曰へば世人或は兩者の衝突するや否やを論ずるものならんと速了せんも兩者の關係は單に衝突非衝突と云ふ如き漠然たるものにあらず非衝突と曰ふうちには種々の關係を含有せり故に吾人は更に精細なる觀察を下して左の諸疑問を解釋せんと思ふ先づ科學は宗教と兩立せざるか即ち科學是ならば宗教非なるべく宗教是ならば科學非なるべし兩者孰れか是なる又兩者共に是なりとせば科學は宗教と何の關渉する所あるか科學は宗教をして愈〻眞ならしめんとするか將た宗教は科學のために證明を與へんとするか

是等の問題に對する基教と佛教との位地は自ら兩者の特色の異なるに由りて異なれりまづ基教徒の所說によれば科學と宗教と全然相容れざるは猶氷炭の如し科學主義は無神論に歸し自然教に終はる基教の有神論天啓教なるとは決定して兩立する能はず科學は宗教の神聖



を犯し神人の威嚴を害ふ科學者は基教の罪人なり苟も神の道を守らんものは力を竭して科學を排斥せざるべからず蓋し基教は萬物の表に超然獨立せる人性的造物主ありと信じ而して此造物主の直傳面授により其教旨を建立すと信ずるが故に人智人力を輕賤すること甚しく苟も經驗と云ひ事實と云へば直に之を目して異端外道の徒となして排斥至らざることなし是を以て信仰の自由なかりし專制政治の下に在りては基教の獨斷的教旨を妄信せざるものあれば忽ち之を擒へて或は獄中に繫ぎ或は國境外に放ち或は斬首焚殺の慘刑を加へ或は干戈を動かして遠征軍を企つに至れり然れども時勢の赴く所道理のある所今や益〻科學の光明大千世界に輝かんとするに至るや倉皇狼狽彼等大に舊時の頑迷執拗を改めたりと雖尚保守退嬰主義は基教徒の特色となれり彼等は遂に天啓奇蹟を放下する能はざれば也

佛教は東洋の宗教也東洋には嘗て科學の發達なかりしを以て宗教と

科學との問題は未だ研究せられざりし也近來泰西の學術頻りに輸入し來りてより始めて科學と佛教との關係を論ずるに至れりされど老僧耆宿の佛教に精通せるものは泰西科學の精神に昏く年少氣鋭の士の科學を知れるものは佛教の眞髄を會せず是を以て兩者の説く所抵觸して相容れずされど佛教は基教の如く超自然的一物を説かざるを以て佛教と科學とは相衝突するの説をなす者少なきに似たり但舊習を保守せるものは佛教を以て科學と相關せずとなして思へらく「科學と佛教とは其方法と目的とを異にせり佛教の目的は上菩提を求め下衆生を化するに在り科學は只自然界の現象を説明せんとするに過ぎず宗教は内に省み科學は外に馳す科學の理法は佛教の眞理を左右する能はず佛教何ぞ曾て耳を科學に傾けんや」とされど新佛教徒は之に反して科學の研究したる結果を採用して以て佛教の基礎を説明せんと欲す目今我國の宗教界は此二大潮流の衝突によりて活動せんとす



るの傾あり

佛教及基教の科學に對する位地を明め得たりとすれば是より吾人の所謂る宗教なるものと科學との關係は佛教徒の所論の如くなるべきか將た基教の所論の如くなるべきかを説かざるべからず吾人の見る所によれば基教の衝突論は固より大に誤まれり佛教の沒交渉論も亦偏せりと謂ふべし吾人は科學を以て宗教の塵垢を洗濯し宗教の眞美を發揚するものとなす請ふ之を辯せん

孰〻按ずるに眞理は遍からずと云ふことなし主觀界と客觀界とを問はず事理整々として一絲毫も亂れず春來れば百花爛熳として東風香しく秋來れば千山木落ちて黄葉堆をなす水は必ず卑きにながれ火は必ず乾けるを燥く二二を加ふれば四となり兩圓相交はれば必ず二處において斷ず熱するときは大海の水も雲霧となりて飛散し寒きときは

白氷となりて港灣を封鎖す誰か亦之を疑はんや宗教は此眞理を得て安心立命せんとし科學は此眞理を得て智識を擴大せんとす科學も眞理の發現せる宇宙を觀察し宗教も道理の一貫せる乾坤を看破す此眞理を離れなば宗教も魚の水を失へるが如く科學も龍の雲を得ざるが如くなるべし既に是普遍の眞理宗教に現はれて科學に隱れ科學に現はれて宗教に隱るゝの理あらんや乃ち知るべし宗教と科學とは決して相衝突するものにあらず否却て相助け相和するものなるを

且それ眞理は眞理なり宗教の眞理と曰ひ科學の眞理と曰ひ眞理に兩般あるべくもあらず宗教の上に在りては則ち眞理たるを得るとも科學に在りては則ち然らずと曰はゞ眞理の眞理たる所以何くに在るか苟も眞理ならば瓦礫の中にも光明赫奕たるべく金剛瑠璃の中にも光明赫奕たるべし彼に在りて一分を增さず此に在りて一分を減せず眞理は科學の中にも圓滿なるべく宗教の中にも圓滿なるべし若し其れ



然らずとせば是れ決して眞理にあらず妄執迷信の化身に過ぎずと謂ふべし故に吾人は思惟す宗教の眞理は卽是れ科學の眞理科學の眞理は卽ち是れ宗教の眞理

科學とは何ぞ

吾人が經驗より得たる智識を組織し整理する之を科學と曰ふ科學の目的は事實を說明するに在り事實を整理して同類と異類とを分ち其間に行はるゝ理法を發見するに在り恰も高塔を築くが如し個々の經驗は臺石なり科學は個々の經驗を連結して更に其上に一層を築く高きに上るに從ひて一層は一層より小に遂に最高處に到れば一個の大石あるのみ科學が概括を最高級に進めて宇宙に一大道理の貫通するを說くは正に此に似たり此の如く層々相重るも上下連結して毫末の罅隙を生せず互に相關係して一團となる要するに科學は事實を根據として立つものに外ならざる也

さらば科學は如何にして宗教の汚垢を洗滌すと曰ふか

宗教は鬼神説(ミソロジー)より發達す往古人智蒙昧の頃に在りては眞理を其まゝに感受し表詮する能はざりしを以て何れの宗教も多少の餘滓を混和せざるはなし蓋し人智は雜より純に進み具體より抽象に進むものなるが故に蠻族は眞理と曰へる抽象的思想を有する能はず僅に具象のものを借りて其意を寫するに及んで始めて其道理を悟るのみ假令ば基教の天帝なるものを立つるが如き智惠未だ進まざるものをして天地の間に磅礴せる一大嚴律の存在を會せしめんには勢之を具體化せざるを得ず微妙不可思議の一大原力ありて人間の行爲を支配し苟も之を犯すものあらば立處に責罰して毫も假借せずと説くも愚者は之を抽象的に思惟する能はず從つて其信仰を動かすことなしされどかの大勢力を具體化して之に塲處を與へ形骸を與へて萬物以外に人性的天帝なるものありて吾人を監督すと説かば彼自ら釋然として會得す



べし而して其最も蒙昧なるものに至りては是すら了得する能はず遂に天帝を以て人類の如く四肢を有し五體を具へ七情を生ずるものとなすに至る今日よりして之を見れば妄誕無稽も亦甚しと雖昔時はこれを以て一大事實となしたりし也

故に宗教思想の中には眞僞相混じ是非相交はると謂ふべし眞理は非眞理と手を携へ事實は非事實と肩を並ぶ猶礦山より新に堀り出されたる金塊の如し必ずや智惠の爐鞴に入れて千鍛百錬を經んを要す科學は卽ちこの爐鞴なり鉗鎚なり宗教の妄想を滅盡して獨り其眞髓を殘留せしむ

論者曰く獨り宗教にのみ眞僞混雜して科學は徹頭徹尾眞理のみなるか科學は何の力を以て宗教を鑒識せんとするか

宗教の發達は科學以前に在り卽ち人智未だ蒙昧なりし頃已に人心の蘊底に薫習して天賦の如く牢として拔くべからざるはどゝなれり殊

に宗教の性質として由來頗る獨斷的妄信的保守的に流れ最後の判斷を眼前の事實人心の理性に仰がずして寧ろ歴史上の事實に仰がんとす(此弊は殊に基教に著し)是を以て同じく事實に由り經驗に由り眞理に由ると云ふも科學の常に眼前の事實を本とし人心の理性に訴へて合理のものは悉く取り不合理のものは必ず捨てゝ歩一歩を新にするが如くなる能はず宗教は停滯不動の死水に似たり科學は混々流れて晝夜を舍てざる河水に似たり其水たるは一也止水にして始めて影をうつすべしと雖動かざるものは腐敗し易し須らく溝を穿ちて疏通の方法を講せざるべからず是故に宗教は科學の所説に從ひて其事實に背けるものを捨てざるべからず是れ宗教をして益〻光明を放たしむる所以なり

眞正の宗教なるものは赤條々に眞理を感得したるもの一點の汚垢を止めず嘗て科學の洗滌を要せずと雖今時の所謂る宗教なるものは大



抵歴史に根據して眞僞相半ばせるものを其まゝに傳へたり故にかの徒に舊套を頑守して時と相移り理と相稱ふを欲せざるものゝために殊に科學の光明を假りて妖魔を照破せざるべからず

固より科學と雖眞僞相混じ是非相交はらざるにあらず心理學の近年まで靈魂の實體を信じたる如き生物學の異種族發達を説きたる如き化學の今尚原子發動の何たるを確知せざるが如き物理學の電氣力と滋石力とを別物視したりしが如き孰れか事實の未だ充分に研究せられざりしを暴白するものならざる科學はもと萬能力を有するにあらず其誤謬に陷いることあるは勿論なりと雖科學は吾人が經驗を累ぬる毎に其舊弊を捨てゝ直に新發見の原則を採用するに吝ならず是を以て科學は日に月に進歩して其眞は益〻眞にその是は益〻是ならんとす

故に曰く宗教は科學と相待ちて變更革新せんを要す

科學は如何にして宗教の眞美を發揚するか

之を知らんには先づ宗教の特色の大に科學と異なるを會得せんを要す何となれば其異なる所以愈〻明にして相助くるの理愈〻現はるればなり蓋し宗教の目的は安心立命の田地に到るに在り而して之の田地は天地の大道理を直下に感受するにあらざれば到る能はず即ち許多の葛藤許多の道理を一氣に截斷して直下に會せずんば安心立命の田地は夢にだも見ざること在らん是宗教の特色なり而して科學は之に反す科學は宗教の感受するを以て滿足する能はず必ずや之を理性に訴へて説明を附せんを要す宗教は見よと曰ひ科學は説かんと曰ふ宗教は山は高し水は長しと曰ふ科學は何故に山は草木を生じ水は魚介を住ましむと問ふ科學は了知分別を本となし宗教は直下に會するを旨となす此點に於ては宗教と科學の區別は猶宗教と哲學の區別の如し又之を山河草木の大地の上に羅列するに喩へんか山聳ゑ水流れ草萌ゑ花開くの狀は科學の千種萬樣の差別界に入りて雁雜なる智識を研



究するに似たり而して山も川も草も木も皆一樣に大地を基礎として建立せるは猶ほ宗教が平等一味を説くが如し宗教と科學と同一宇宙を觀ずるに外ならずと雖宗教は之を内面よりし科學は之を外面よりす宗教は先づ宇宙の大體を感得して而る後差別界に入らんとし科學は差別界を知悉して而る後平等界に入らんとす宗教の眞理は科學之を説明すべし科學の眞理は宗教之を感得すべし畢竟するに宗教と科學の區別は客觀的事實の上に在らずして寧ろ主觀的解釋の上に在りと謂ふべきか

果して然らば宗教と科學とは互に相映發して眞理を擧揚するものとなすべし宗教にて得たる眞理を科學界に出して之を千差萬別の上に試みて益〻其眞理なるを見るべく科學にて究めたる理法を宗教の上に應用して益〻その誤らざるを見るべし兩者相反すること愈〻大にして相照らすこと愈〻明なるの理は此に至りて大に明瞭を加へたりと謂ふべ

からざるかさらば若し基敎にして眞理の至純なるものを具有すとせば何ぞ必ずしも科學を以て無神論となし不道不義となすの必要あらんや況や科學者を輕賤し侮蔑し殘害するに於てをや又佛敎にして眞理ならんには科學の紅爐にやかれ經驗の鉗鎚にうたれて益〻其光明を放ちてそすれ豈に科學と沒交渉なるの理あらんや

之を要するに宗敎と曰ひ科學と曰ひ哲學と曰ひ皆同一の人心を以て同一の宇宙を見たる結果に過ぎざれば其目的と其方法とに多少の相違あるも互に相軋轢するものにあらず否却て互に相映發して益〻宇宙の一大眞理を發揮するものとなさゞるべからざる也

是において吾人は劈頭に掲げたる疑問に答ふるを得べし上來述べたる所にて充分に吾人の意見を知り得らるゝならんと雖吾人は結末に臨んで更に其答辯を反覆するの可なるを見る曰く宗敎と科學とは衝



突するものにあらず又互に關係なきものにあらず宗敎も眞理なり科學も眞理なり兩者相並び相照らして益〻其光明を煥發すべし

## 第十二　宗教と道德との區別

宗教と道德とは極めて相似て而かも同じからず是故に世人或は以爲らく道德だに守らば何ぞ宗教を必とせんや國に忠に親に孝に友に信ならば則ち足れり宗教と雖不忠をなせ不孝をなせ不信をなせとは敎へざるべし未來の如何過去の如何は問はずもあれ人生の軌矩は道德だけにて充分なりと是亦一應理なきにあらず何となれば宗敎は道德と相待ちて始めて全ければなりされど宗敎は吾生の過去に涉り未來に及びて不生不滅なる所以を說くが故に道德よりも更に大なるものを敎ふ

吾人は是より道德と宗敎との區別を論じて人生は道德だけにて滿足すべきにあらざる所以を述ぶべし

道德は社會における人と人との關係也宗敎は人と宇宙との關係也道德は吾人が相互間の義務を重んせしむ國家に對しては忠ならざるべ



からず親に對しては孝ならざるべからず友に對しては信ならざるべからずと敎ふ道德は社會の秩序を保維し國家の安寧を支持するを以て目的となす故に法律と道德とは相表裡して一國を整理す法律は行爲の外界に現はれたるものを監督し道德は行爲の動機を是非す親を害せんとするの一念起るも法律は之を責めず其愈外界に現はれて親を殺さんとするに至りて始めて制裁を加ふ道德は直に其動機に向つて正邪を審にして褒貶を行ふ必ずしも其外に現るゝと否とを問はず然り而して宗敎は亦道德の如く固より人心の動機を是非すと雖步を此に止めず更に進んで吾人と宇宙との關係即ち有限と無限との關係を說く即ち吾人は個々孤立の存在をなすものにあらずして時間上空間上無邊無窮の一大道理と相連つて存する所以を說く故に宗敎の一擧一動は直に上霄漢に透り下九泉に徹し過去の過去に涉り未來の未來に及ぶ道德が僅に一社會一國家の利害を事とするの比にあらず宗

教も義務を說き道德も義務を說くと雖其說く所以に至りては大小深淺の差なき能はざる也

宗教は人をして道德を行はしむべし道德は人をして宗教を信ぜしめず譬へば高山に登るに似たり未だ其絕巓に達せざるときはたとひ蹈著し來りたる群山亂嶽を一眸の下に望み得るも其登ちんとする絕頂の景色如何は毫も窺測する能はずされど更に歩を進めて泰山の最高峰に上れば白雲脚下に繞ぐり乾坤掌裡に收まる見ざる所なく聞かざる所なし而して宗教は則ち人心活動の最高峰に上りたる也人心は是に至りて始めて大安心を得大信仰を得何となれば人生は到底道德のみにて安んずるものにあらず靜慮反省して深く人心の淵源に徹するにあらざれば休する時なければなり

宗教の眞髓は無邊の慈悲に在り而して道德の究竟は義務を盡くすに在り義務は寧ろ消極的意義を有し慈悲は積極的活力を有す義務は自



己の存在を先決す慈悲は本來無我を體とす義務は限らるゝ所あり慈悲は包まざる所なし義務は現在的なり慈悲は無量劫に涉る義務は人類の間に行はる慈悲は三界萬靈を含む故に道德は人なり宗教は神なり道德は磊々たる岩石の如し宗教は炎々たる熱火の如し道德は冷然たり宗教は溫然たり道德は秋霜なり宗教は春風なり道德の前に立ては肅乎として容を改めざるべからず宗教の傍に侍すれば悠然として心寬かずんばあらず

宗教は情より發す道德は意より生ず吾人の罪業は須彌よりも高く恆河よりも深し而して善根は粟米粒だにも及ばず吾人は如何にして此心を洗ひて雪の如く白くならしむべきぞ是れ人心の宗教を要し救濟を要する所以なり而して道德に在りては是義を解すべからず道德は時に後悔すべし懺悔することなし宗教は然ゆるが如き情熱に由りて此身を焚き此宇宙を焚かんとす熱誠は道德より來らずして宗教より

來る宗教は清泉の渾々として沸きて止まざるが如し道德は流水の窪所に在るが如し宗教は內よりし道德は外よりす宗教は愛を教へ望を教へ信を教ふ而して道德は索然として蠟を嚙むに似たり

宗教は情より發す故に情緒を純潔無垢ならしめざるべからず妄情惡念の粘縛をはなれて脫洒自在ならしめざる可らず是に於て乎宗教は亦智惠の圓滿ならんを要す何となれば情は盲動より智眼の爛々たるを得るに在らざれば以て規律的働作をなす能はざれば也されど理智は冷然たる石人の如し理智のみを以て人生の行路を進まんとするは石人を鞭撻して走らしめんとする也器械的運動は則ち爲すべし生物的活動は夢にだも見るべからず而して道德亦豈に此に類するなしとせんや

道德の起原は蠻民が各自の財產に對する權利の制限に在り而して宗教の起因は蠻民が人間以上の靈體を信じて之が仁慈を仰がんとする



に在り故に道德と宗教とは其始において殆んど何等の關係もなかりしなり但其發達の途上宗教の決して道德を離れて存すべきにあらざるを見又道德の宗教以外に獨立するは決して人心を滿足する所以にあらざるを見るや兩者相接近し來りて遂に同一體の看をなすに至れりされど兩者の起源の大に差別ありたるは疑を容れざる也是亦兩者を區別すべき一端となすべきか

とに角宗教の源泉は道德よりも深且つ大なりと謂はざるべからず宗教的動機より發現せる道德は深く人心の根蔕より萌芽するものと謂はざるべからず道德固より是なり人生一日も道德なかるべからず而かも人心は遂に道德のみを以て休するものにあらざるを如何せん人心は常に事物の源泉を探り宇宙の祕鍵を握らんと欲す有爲轉變の世界より更に進んで絕對無爲の域に入らずんば人心何の時にか休すべき是に於て乎大に宗教の必要を見る殊に宗教的道德の必要を見るか

の道德を究竟となして宗教の何たるを知らざる如きは深く人心の何ものなるかを究めざるものと謂ふべし

何をか宗教的道德と謂ふ

宗教的道德は宇宙の一大原則を基として發生す此一大原則を領して行住坐臥し著衣喫飯し屙屎送尿する之を宗教的道德と曰ふ眞理は普からずと云ふとなし天地の間に行はれ人心の裡に現はる化學界に在りては原子離合の活力となりて現はれ生物界に在りては進化の理法として現はれ社會人心に在りては道義の大原則となりて現はる宗教的道德は此道義的大原則を感受し所有し實踐するに在り五尺の軀五十年の生命を捧げて大化の赴く所に赴かしむるに在り故に宗教的道德の眼中には宇宙を反映せり一善を爲すも宇宙と共に之を爲し一惡を防ぐも宇宙と共に之を防ぐ是れ豈に有限の空間に住し有限の時間



に相續するものゝ行じ得る所ならんや

故に宗教的道德は力を極めて快樂主義を排斥す吾生既に吾生にあらず盡過去際より盡未來際に涉りて綿々絶えざるものとせば何の爲に一身の快樂を逐ふの暇あるべき一身の生涯は一定の時限を經て亡ぶべし宇宙の生命は永劫に死せずさらば何を苦んで此亡ぶるものを執して彼亡びざるものを捨てんとするてとやある快樂は夢幻の如し虛空より生じて虛空に歸す宗教豈に這般の空華を逐はんや

然れども宗教的道德は制欲主義を敎へず制欲主義は仙人の業なり人間の事にあらず宗教は消極主義を把りて活潑々地の能力を抑壓するを欲せず宗教は只人類をして人類たらしめんと欲するのみ人性を曲げて人間以外の所作を成さんとするは自然の道理と相反す猶ほ松を曲して竹とならしめ鼠をして猫たらしめんとするが如し人心の進步は人心に遵ふに因りて始めて全し此色身を苦しめ此人性を矯めてはた

何をか爲すべき

宗教的道德は無我を體とし不生不滅を基となして而して人類の進歩を信ず只其れ無我なり物として容れざるなし只其れ不生不滅なり快樂に執着するを得ず只其れ進歩的なり希望の光常に前途を照らす

思ふに宗教的道德は冷々たる理論に由りて實行せらるべくもあらず如何に古今の倫理學說を暗んじたりとて如何に聖人君子の嘉言善行を記したりとて道德と何の關係かあらん宗教の面目は遂に窺ふべからず宗教は一たび感悟せんを要す感悟せずんば光彩陸離ならず精力活現せず獻身的覺悟を生ぜず大化の中に安臥するを得ず道德の妙味を味ふ能はず故に宗教なき道德は乾燥なり以て人生をして圓滑ならしむべからず道德にして一歩を進めて宗教に入るなくんば道德の道德たる所以恐らくはそれ亡びんか



## 第十三　宗教と教育との關係

若し人道を進歩し天化を發揚するを以て宗教の大本領となすとせば何ものか宗教的ならざるべき春風の嬝々たる秋水の玲瓏なる銀漢の燦爛たる山河の紛糾なる孰れか宗教の面目ならざる非情すら尙且つ然り況んや有情の生物においてをや況んや最靈の人類においてをや彼の一擧動より進んで家をなし國をなし世界をなすに至るまで大小の活動皆是れ宗教的ならざるはなし是を以て宗教は個人的なると同時に社會的なり獨立的なると同時に共同的なり是を以て宗教は社會問題に關係し國家成立に關係し而して亦能く教育に關係す

教育とは何の謂ぞ

教育の何たるかは學者間に種々の議論あることならんされど此書はさせる學理を闡明するにあらずして單に眼を實地の上に注ぐものなれば吾人は教育を以て人類が有する能力を秩序的に發達せしむるも

のとなすを以て滿足すべし其人類が有する能力は如何なるものなるか秩序的に何處まで發達すべきものなるか人心の發達は何を以て秩序的となすべきかなど曰ふ議論は此篇の避くる所なり但其大體を知悉し得ば則ち足る

吾人が今殊に此に論せんとするは學校教育のことなり若し人心を以て無窮に生々たるものとせば其内外の經驗は千種萬樣にして學校教育のみを以て教育となし難きは勿論吾人の生れざる以前生れ出でゝ學校に入らざる以前學校を卒業したる以後此世を辭し去りたる以後皆是れ自然の大教育なるべしと雖吾人はさせる廣大なる意義にて教育の語を用ひんとするにあらず吾人が今日まで蘊蓄したる經驗を整理して之を秩序的に人爲的に後進に傳授するを以て教育となすべし教育は猶ほ財産相續の如きか親が困苦經營して蓄積したる財産を子に傳へて更に之を增殖せしめんとするが如きか吾人は祖先が代々を



經て經驗したる智識道德を後世に傳授して以て更に許多の新智識を加へ高尚なる道念を起さしめんと欲す教育は先進が後進に對する宗教的義務なり何となれば吾人は此の如くにして人類全體の進化を計らざるべからざればなり

故に教育は只現世に應ずる人物を養成するのみを以て滿足すべからず必ずや後代の子孫をして彼等は前代に引き續きて人類の理想を實行すべき一大責任を有するものなりとの覺悟をなさしめざるべからず祖先が今日に遺したる物質的智識を後世に傳ふるのみにて教育の能事畢れりとせば猶ほ油少き燈に火を点したる時一時は皎然として暗窟を照破するに足るべしと雖固より其量限りあるを以て永きを保つ能はざるが如きかたとひ古今の學問を暗んじ東西の歴史を審にしたりとて其だけにては何の要かあるべき世人は彼を博士と稱し自らも亦大に學者なりと思惟せんも人類全體の進歩に對して彼は幾多の

功力を有するとなすべきか之を鷄鶏教育と曰ふ故に吾人は無限無邊の宗教的膏油を焚きて祖先傳來の無盡燈をして相續不斷ならしめざるべからず

如何に才識高遠にして志氣英邁なるも之をして其向ふべき所に向はしめざれば徒に其私慾を逞うするの好方便とならんやも圖られず譬へば宗教的信仰は梶機の如し才智藝能は櫓の如く檣の如く帆の如し如何に滿帆に風を包み巧に櫓を操りたりとて能ありて全船の方針を定めずんば前後左右に同轉して彼岸に達するの期なかるべきか教育を以て只世間的能力をのみ發達せしめんとするは物質論者の所說なり過去を顧みず將來を望まず一向に現世五十年の生涯に隨順せんと務むるは人をして靈利なる動物とならしむるもの世を誤り國を誤まらずんば已まじ

然り而して吾人熟〻我邦教育界の現狀を察するに轉〻感慨に堪へざるものあり蓋し青年は第二の國民なり吾國前途の運命は實に彼等の雙肩に懸れり彼等にして健全なる思想を有せば則ち我國の前途は望あり



と曰ふべし不幸にして病的徵候を呈せんか今人は當に祖先に對し子孫に對して何の面目あるべきぞ祖先の吾人に遺產を傳ふるや忠言して曰く汝等亦當に更に之を增殖して子孫に讓らざるべからずと而して今人の之を青年子弟に傳へんとするに當りて却てこれを減殺したりとせば今人や其責任を重んぜざる大なりと謂ふべし我國今日の教育は以て將來の進步に幾多の利便を與へんとするか吾人は未だ容易に答ふる能はざる也

學校教育に宗教的思想を加へよとは青年をして必ず珠數を爪繰しめんとするに非ず又十字架を負はしめんとするにあらず十字架を取り珠數を握る不可なるにあらず而かも宗教何ぞ其形骸を必とせんや吾人は宗教の精神を取り來りて青年を感化すべしと主張す宗教の精神

とは何ぞ吾人は個人にあらず「一切」の一分子なりとの覺悟即是れ、五十年は色身の生涯精神の生涯は始もなく終もなしとの信仰即是れ、吾人は進化の大潮流に遊泳するものなれば決して現在を以て滿足せず益〻進んで圓滿の域に到らんとの希望即是れ、我執の妄念を拂つて四海同胞の大道義を悟得せんとの道念即是れ、形式儀相に貪著するは第二義の事吾人は只這般の精神を把りて青年の腦底に印定せんと欲する耳」

教育者動もすれば否大抵は宗教を以て基教の如く神を拜し佛教の如く佛をたのみて後生の經營をなすものとなし之を以て青年進取の氣象を沮喪し自由討究の思想を枯死せしむと云ふ甚しきかな彼等の近眼なるや宗教を以て保守退嬰を教へ未來往生を教ふるものとなすは過去の事なり且喜すらくは宗教の精神決定して此に在らず宗教は義務を說き進歩を教へ大慈悲を運び出し大信仰を齎らし來る人心本來の性能は之によりて益〻發揚せられ自由自在の妙用は之によりて益〻現



露せられん教育者が宗教の事實に味きは其眼中只現實有限差別個人名譽利益を見るに過ぎざればならん佛者は之を魔耶の迷霧に包まれて宇宙の眞相を見る能はざるものとなす

青年教育に宗教的思想を加ふるは彼等をして無限大の力を得せしめ無限大の信仰を得せしめ燃ゆるが如き熱誠を以て事に當らしむる所以なり宗教は猶木に根を與ふるが如し瓶中の梅花春に及ばずして開くあらんも一たび寒風に遇へば萎靡せざるを得ず而してかの溪上の一株雨にさらされ雪にうたるゝも巍然として凋落せず年々春來れば自ら花開きて遊人の來りて之を訪ふと否とを論せず是何がためぞ只根を有する深ければにあらずや宗教思想を以て教育の中心となす亦將に此の如きものあらんずる也

近時學校教育の所謂る倫理なるものを看よ書を誦するにあらざれば理を講ずるのみ修身書の編纂にして頗る兒童の心意の發達に適合し

たるものありとするも之を以て人心祕奥の處に潛める道念を喚起し得べしとせんや親に孝に君に忠に一旦緩急あれば義勇公に報ずと敎へたりとて之を以て人間と宇宙とを繫げる一大鐵索の存在を覺知し得べしとせんや

それ人心は必ず究竟を極めんと欲す或は一時の迷妄に礙へられて淺膚迷繆の見に安んぜんとするも機に觸れ緣に應じて其內祕を暴露し來らんと欲す看よ如何に理を說きて辨懸河に似たるも生死岸頭に臨んでは平生の力量總に用否者學校の講義敎科書の素讀此に至りては半文錢にだも値らず豈啻生死の境に臨むときのみならんや大信仰を得ざるものは日常の一擧一動と雖皆妄念の所作たるを免かれず手を飜せば不測の暗黑直に其方寸を逼迫す此の如くにして經過せば人生五十年蜉蝣の一生と何ぞ擇ばんや

上來の諸章にて屢〻述べたる如く宗敎は決して他人の手より得らるゝものにあらず他人の手よりして得らるゝものは只敎誨暗示あるのみ苟も宗敎の眞味を咀嚼せんとならば自ら手を下して始めて得べし故に敎育家は此覺悟を以て靑年に對せんを要す靑年をして勉めて這般の思想を惹起せしむるの方法を案出せんを要す換言すれば敎育家は宗敎家ならざるべからず少なくも宗敎的思想を有するものならざるべからずされど吾人の宗敎なるもの決して抹香臭きものにあらざるは從來の諸章にて明かなるべし

吾人熟〻考ふるに吾國民の大缺點は大信仰と大希望とを缺くに在り在昔圓覺開祖佛光國師の始めて吾國に來るや直に邦人の大信仰を缺けるを看破して曰く「我日本の兄弟を見るに一生悟を得る多かるべからず此國の風たるや只智才を貴びて悟解を求めず是故に設ひ懸根あるものも博く內外の典籍を覽深く巧僞の文章を嗜みて自ら此事を究むるに遑あらず迷中に一生を過ぎ了る固に憫むべきとなす」と是に由り

て之を觀れば日本人の短處は古よりして輕佻浮薄なるにありしか我國山河の形勢美は則ち美なり而して豪壯雄大の景勝に至りては闕如たり四時の氣候適度に行はれて夏も甚だ暑からず冬も甚だ寒からず而してかの炎熱金石を爍かさんとし寒威鐵骨を劈かんとするが如きは絶にて有ることなし地勢氣候既に然り此間に生長したる大和民族が「朝日に匂ふ山櫻」の如くなりたるも亦已むを得ざるべきか然れども こは過去の事なり今後の日本人たるもの豈亦此の如く纖小細巧の人種となり了るべけんや庶幾くは吾國の教育者たるもの今日の青年子弟を教育して大信仰大希望を有するものとならしめよ



## 第十四　宗教と社會問題

吾人は前章までにて畧宗教の理論的方面とも云ふべきものを論述し得たりと思ふ故に是より歩を進めて其實地的方面を開拓せんと欲す總て理論は實地を待ちて始めて其全きを得るものなれど殊に宗教の如きに在りては實地を離れて何事をも爲す能はず何となれば宗教の生命は只人生日常進退の中に在りてのみ活動するを得べければ也さらば本書も亦宗教の社會的問題に對して如何なる意見を有するかを審にせざれば全きを得ずと謂ふべし

然れども吾人は今社會問題てふ名稱の下にて一般社會の間に起るべき諸種の問題を研究せんとするにあらず又西洋諸國における社會的現象につきて宗教の意見を述べんとするにあらずもと此書の目的は現今吾邦の精神界の衰耗を救治せんとするに在るを以て吾人は此章にて我邦の現在及將來の社會問題の重なるもの一二を宗教の立脚點

より論せんと欲す

何をか我國の社會問題となす吾人は將來に起るべき貴賤貧富の衝突を以て重大なる社會問題となし次に現今における婦人の位地遊廓公設の制度監獄囚徒の教化等の如き皆宗教家の考究すべき社會問題なりと思ふ請ふ逐次に吾人の意見を畧述すべし

それ宗教の根據とする所は個人的なると同時に宇宙的なるに在り差別を說くと同時に無差別を說くに在り彼我の存在を許して直に無我を唱るに在り人生は生滅すと云ふと同時に不生不滅なりと云ふに在り汝の心を淨くせよと教ふると同時に汝の同胞のためにと云ふに在り只汝獨り潔からんとするなかれ四海萬國は汝の兄弟なるを知れと教ふるに在り宗教は汝の生命は六尺の空處を塡め五十年の時限に相續すと雖更に其眼を濶大にすれば人種の黑白に關せず祖先の祖先より子孫の子孫に至るまで皆汝の生命を呼吸せずと云ふてとなし否汝の生命は這般無邊無窮の一大生命を反映するに過ぎずと敎ふ是を以て宗教は自由を劍となし平等を楯となして社會の紛糾を理せんと欲すれども無政府黨の如き極端なる個人主義を取らず又社會黨の如き過激なる社會主義を取らず

然も此の如しと雖宗教は決して貴族と富者とに加担する能はず却て平民と貧者との爲めに同情の涙を灑ぐ宗教は社會の革命を惹起せんとは欲せず而れども富の力を恃み族の尊きを恃みて專權を用ふるものに向つては全力を以て之を責む蓋し人類相互の間に畛域を設けて權利の偏重を來さんとするは彼等少數者の罪なればなり

彼等敢て智の多きにあらず德の高きにあらず力の大なるにあらず只祖先の遺物を享け得たるがために多數者よりも一層驕奢を逞うし得るに在るのみ彼等の心懷冷々として氷塊に似たり人情を知らず慈愛

を知らず義務を知らず一向自家の利欲に任せて弱きもの賤しきもの低きものを壓して到らざる所なしショッペンハウエル曰く富者の無學なるはゞ淺間しきはなし境遇の順適なるは偶〻以て彼等の情慾を增長せしむるに足れり貧民は額に汗して勞働せざるべからず故に慾を逞うするの遑なしと（記臆のまゝなれば原文と多少の相違あらん）思ふに人類は其力の益大なるに從ひて其責益〻大なり彼等の大なるは彼等自身のために大なるにあらず天は實に彼等をして人類全體の進歩のために殊に彼等を大ならしめたる也富多ければ其社會に盡くすべき義務も亦多し才德高ければ其社會に與ふべき助力亦大なり彼等は實に人道のために畢生の力を出して宇宙全體の化育を助けんを要す何ぞや金錢才德は個人の私有にあらずして萬人の共有なればなり人類は個人的存在の外に宇宙的生命を有するものなればなり然るにかの少數者は自家の位地を害用して私慾を擅にするの具となさんと



するに至りては宗教者は當に天地の道理に代りて之を責めざるべからず其自由を享有すること愈〻多くして其責任愈〻大なるは道德の大原則なり少數者は高等教育を受くるの力あり才德を進歩するの力あり多數を誘掖するの力あり其善をなさんとするに爲す能はざるもの殆んど之なし故に吾人は少數者の責任を攻むるに於て寧ろ酷に失するも決して寛に失するなからんを望む

自ら貴族なり富者なりと稱して人類を超絶せるものゝ如くに思ふは寧ろ笑ふべく憫むべきものにあらずや何を以てか笑ふべき其虛誇なるがために何を以てか憫むべき其精神の枯凋せるがために彼等は社會の外面を見れども其內面を知らず形式を偏守すれども實情を看破せず少數者は社會の人類全體の社會なるをわすれて唯彼等の獨り歡樂すべき所となす平民は共に働き共に憂ひ共に助け共に望むが故に溫然たる同情は常に其間に行はれて自ら宗教的生涯を送れども少數

者に在りては毫も此の如くなる能はず愉快を共にし虚誇を共にし妄想を共にすと雖同情の幼芽は決して這般磽确の地より生ぜざるなり富貴の人徳を傷け人心を害ふ大なりと謂ふべし

富者と貴族とは此の如くにして多數平民の怨府となる多數平民固より正しきにあらず彼等は時に少數者の如く私慾を擅にし得ざるより之を嫉むとなきにあらずと雖其責は寧ろ少數者の徳少なきに由ると謂はざる可らず若し少數者にして天が彼等に與へたる使命を全うせんとせば多數者は直に之を仰ぎて徳星となすや必せり蓋し多數者は常に不便利不自由の境涯に立てるが故に充分に其智徳を發達するの餘裕あることなし吾人は彼等の往々にして不義敗徳なるを咎むる能はず但貴族と富者とが自家の社會における眞正の位置を知悉せざるを責む

翻つて吾國の現狀を見るに貧富の軋轢未だ甚しからず貴賤の衝突未



だ著しからず是大に喜ぶべし然れども物質的文明の益進むに從ひては富者と貴族とは自ら社會の怨府となるに至らんか特に今日吾邦の制たる頗りに貴族を增加して皇室の藩屏となすと稱す而して其多くは祖先傳來の遺物を相續したる文盲漢にあらざれば時の政府に阿諛して一身の榮華を計るの徒のみ彼等の我邦における殆んど無用の長物たるに似たり皇室の藩屏には四千萬の國民あり何ぞ殊更に優柔惰弱の貴族を恃まんや吾人は貴族殊に世襲貴族の制を存して社會の間に人爲的階級を設くるは決して我國の進歩を計る所以にあらずと思ふ況んや勳功なく才徳なく名望なき凡庸漢を以て濫りに貴族に列するの弊あるにおいてをや恐らくは吾國將來の社會問題は貴族と平民との軋轢にあらんか

固より社會の進歩は一歩一歩に進み來る急激の改革は却て上下を損害す決して國運の進歩を助くる所以にあらずよしさらば我邦今日の

貴族制度を以て封建の陋習萬已むを得ざるに出づるとせんか吾人は徐ろに將來の大計を定めて人爲的階級を次第々々に打破するを勉めざるべからず少なくとも宗教を以て上下の關係を圓滑ならしめざるべからず

貧富の關係も亦然り泰西の物質的文化の益〻我邦を風靡するや自ら富者の兼併主義を惹起して貧民を奴隷視するに至らんか是に於てか資本主と勞働者との爭も出て來るべく貧民が麵包を求むるの聲も喧しくなるべし宗教は此際に處して何をなさんとするか渦に臨んで井を穿つが如きは智者の爲さゞる所宗教家たるもの豈に豫め期圖する所なかるべけんや

故に宗教家は今の時に當りて貧民のために一方には職業を與ふべき方法を案出すると共に學校を建てゝ之を教育し病院を設けて之を健康にし傳道社を興して之を德化して以て彼等の物質的生活と共に精



神的生活を改善進捗せしめざるべからず而して又一方には富者の盧誇心を抑へ貴族の獨尊主義を制して以て彼等の精神を寛潤にし彼等の感情を純潔にし彼等の私慾を伏斷せざるべからず卽ち多數者のためには精神的光明と物質的食物とを與へ少數者のためには專ら精神的光明を與へんを要す而して之を實地に施して上下貧富を緩和調停するの術は富者及貴族をして貧賤なるものゝために慈善學校慈善病院等を設けしむるに在らんか

寺を建て像を造り經を誦する有りがたきに相違なかるべしと雖宗教の本務は決して者邊にあらず宗教は唯不生不滅の生命をして益〻高等の進化を營ましめんとを勉む百千の方便皆是應病與藥なり但時に應じ機に臨んで其精神を自由に發現せしめんを要す古は則ち是なりしと雖今は則ち必ずしも是ならず封建制度の下に在りて朝廷幕府の保護を得たるときは宗教を以て社會事業を超絶したるものゝ如くに思

はしめたるも亦不可なかりしならんされど今日立憲政治の時代に在りては徒に舊套をのみ是れ守るべきにあらず當に宗教をして益〻現世的に益〻俗人的に益〻實地的に益〻人道的ならしめんを要す基教は暫くおく佛者今日の事業は決して我國の現狀に稱へりと思はれざる也

或は曰ふ生存競爭の結果優勝劣敗は勢のまぬかれざる所貴族の自ら尊き富者の自ら勢ある亦之を如何ともするなき也と是を俗論と曰ふ人性を曲ぐる實に甚しきもの也生存競爭は生物界一般の理法なれど也人間界は特別の事情を有するが故に之を以て律すべきにあらず人類は社會をなせり共同生活をなせり動物の個々獨立して奔走するが如きにあらず故に人類には同情相憐の念頗る强しその家を成し社會をなすは之あるがためなり故に生物進化の理法は人類に至りて一頓挫せざるを得ず而してかの社會的進化と云へる新勢力の發現したるは此必要に迫まられたるに因る若し富者も貴族も共に社會の一分子



を組織し人類進化の大海中又一小波を揚ぐるものなるを知らば豈一點の同情なくして止まんや彼等にして果して多數者のために一掬の涙を灑ぎ得るとせば人類は決して優勝劣敗の酷法に由りて支配せらるべからざる也

同情の一念發達するときは無邊の大慈悲となる佛者の所謂菩薩の四大誓願は實に此大慈悲の源泉より涌出したる也吾人は富者及貴族に向つて悉く菩薩の願行をなせと曰はず但少しく其同情の一念を擴大して貧者のために一臂の力を假さば則ち足れる也かの祖先の靈を祭り自家の罪業を亡ぼし子孫の繁盛を願はんために或は經を手寫し或は佛像に禮拜供養し或は放生會を營み或は施餓鬼をなし或は許多の葬祭費を支出し或は施米をなす何れも殊勝は則ち殊勝なりと雖人類全體の進歩に幾多の利益を與ふるとすべきか吾人は寧ろ是等の費用を其時々々に貯蓄したる後之を集めて或は施療院を設け或は悲田

院を建て或は學寮を興し或は職業を興ふるの會社を造りて多數者を智の上、德の上、情の上において總て健全ならしむるの方法を講せんと欲す社會は全體を擧げて進歩せざるべからずたとへ其一局部のみ如何に發達したりとて是を以て文明となすを得ず文明は智の上形の上にのみ發達したるを以て圓滿の域に到れるものと曰ふべからず吾人は德と情の上において進歩せるものを眞成の富者となし貴族となさんと欲するもの也

以上吾人は吾邦の將來において貧民と富豪との軋轢貴族と平民との衝突を生ずるの傾向あるを憂ひて宗教家が今日に覺悟すべき所以を說了したれば是より我國現今の社會問題として婦人の位地を進むべき所以を論ずべし

吾人は我國今日の婦人の境遇を見て頗る其憐むべきものあるを覺ゆ



何れの國に在りても文化の光行きわたらぬ所には强者は常に弱者を壓して其奴隷となさゝるはなし特に東洋に在りては古より儒教の男尊女卑主義廣く行はれたるが上に佛教も亦女人を以て罪深きものとなしたるがため婦人が社會における位地は自ら下りたり況んや封建制度の弊たる常に重きを武士に置きたるを以て男兒愈高くなりしにおいてをや我邦維新の大變動ありしにも拘はらず婦人の境遇の依然として故の如きを見れば舊弊の容易に拔くべからざるを知るべし然れども宗教は今日の狀態を以て滿足する能はず婦人をして相應の境遇に進ましめざれば其本分を盡せりとなさゝるなり

米國は女尊男卑の國なりと曰ふ然れども志あるもの尙婦人の境遇の自由ならざるを論じて止まざるを見れば强者の弱者を壓するの弊實に深且大なるものありと謂ふべしその吾國の婦人が男兒のために鐵索を以て束縛せらるゝの狀あるも亦宜なりとなすべきか思ふに宗教

の眼中には男女の差別を映せず一切平等にして自由なれば一をして殊に跋扈せしめ他をして頻りに沈淪せしむるが如きことあるべからず吾人は宗教の名によりて婦人を保護せんと欲す

蓋し婦人の脆弱なるは其天職專ら種族を保存せんとするにあれば也婦人は人生の未來を代表す人生の不生不滅なる所以を徴に説明す分業の原則は男兒をして全力を竭くして外患に當らしめ婦人をして一意專心に子孫相續の經營をなさしめたり男子は外に向つて戰ひ婦人は内に在りて忍ぶ男子は勞せざるべからず婦人は苦しまざるべからず男子は英雄の事業を成すに似たり婦人は殉國者の難に死するに似たり是くの如くにして男子は剛强聰惠の德性を具へ婦人は温柔優雅の美德を有するに至りたり故に人生圓滿の進化は男子の勇氣智惠志望に加ふるに婦人の忍辱純潔温雅を以てするにあらざれば遂に期すべからざる也



力あるものゝ力なきものを壓し智あるものゝ智なきものを壓するは動物界の常情なりされど人類の動物界を出でゝ社會的生物となれるや久し何が故に尚は動物の遺習を相續せんとするかこれ甚だ謂はれなきことゝ曰はざるべからず然るに世に一種の論者あり思へらく婦人の男子に制せらるゝは止むを得ざるに出づ今經濟上より之を見るに婦人は男子の保護支給を待つにあらざれば自ら活する能はず是自ら婦人をして男子の下に屈せしむる所以なりと然り我國現今の事情は正に此の如きものありと雖是れ只一時變遷的現象に過ぎず且是がために男子は婦人を抑壓すべしと曰ふの理は毫も之れなき也豈宜之れのみならんや男子も亦婦人の内に在りて家政を理するなくんば其全力を外に用ひる能はざるべし古來英雄傑傑が閨閤の整否に由りて或は大に其力を延べ或は大に其力を殺がれたるの例枚擧するに遑あらず擧竟するに吾人は婦人に由りて生れ婦人に由りて育ち婦人に由

りて生活し婦人に由りて死す婦人決して賤しむべからざる也人類の人類たる所以は其體力にあらずして其智恵に在り其智恵にあらずして其德操に在り而して婦人の德たる必ずしも男子に如かずとなさず男子の德たる必ずしも婦人に超絶せりとなさず男子も婦人も獨立にては其德や圓德なる能はずさらば一を揚げて他を抑ゆ是豈に沒理沒情のきはみならざらんや

今婦人をして男子の制壓を離れしむるも男子は之がために何の損する所あらんや否吾人は却て其得る所多きを見る何ぞや吾人は之がために一層高尚なる生活を營み得べけれはなりされど吾人の意は婦人をして男子の如くなれと曰ふにあらず但婦人は婦人の美德を益發揚し男子は男子の德操を愈養成して以て相助け以て相治めんことを要する而已もし婦人の婦人たる所以を失して男兒に等しからんとせば是れ婦人の性を殘害するなり天地の理を無視する也故に吾人は男子



をして婦人を敬愛せしめんと欲すると同時に婦人をして益本來の優雅を養はしめんと欲す宗教の敎ふる所は決して偏重なれ偏輕なれと曰ふにあらず勉めて其本眞を失はざれと曰ふに在り鵠は愈黑くして其鵠たる所以愈全く鷺は愈白くして其鷺たる所以愈全し男子と婦人と各其異なる所以を發達せしめて始めて圓滿なる進化を期すべし」

吾人は吾國の現狀を見て其上より下に至るまで婦人を奴隷視するの弊甚しきを憂ふ宗敎が今日社會的事業の一として務むべきは婦人の境遇を改善して男子の桎梏を脫せしむるに在り夫婦の關係をして主僕の如くならしめず朋友の如くならしむるに在り

婦人を以て奴隷視するの最も顯著なる實例は娼妓公設の制是也

獨逸の大哲學者カントは人間を以て手段に使用するの甚だ不德なる所以を論じたり蓋し人間は其れ自身にて目的なり文化の進歩も社會

の改善も皆人間を目的とするによりて始めて高尚なる意義を有するに至る然るに奴隷制度は人類の自由を奪ひ其本性を曲げて之を器械視する也自家の情慾を充さんため他の意志德操を蔑視して之を手段に使用する也娼妓を公設するは則ち法律に由りて人類の威嚴を侮辱し人類の神聖を瀆冒するもの其不倫も亦甚しからずや

如何なる境遇に沈淪するも人類は恆に人類を以て目的とせざるべからず自家を重んずる如くに他をも重んぜざるべからず自家の自由を守ると同時に他の自由を害すべからず宇宙は自家の宇宙にあらずして宇宙の宇宙也然るに娼妓の制の如きは薄弱なる女性をして全然其威嚴其貞操其自由を泥土に委せしむるものにあらずや彼等は人類視せられずして物品視せらる家を買ひ衣服を買ひ食物を買ふが如く顧客は自由に彼等を買得して其節操を蹂躙し得る也而して顧客は之を法律の權利に據りて執行す而して妓樓の主人は又法律の名に由りて



婦女子に迫まりて其自由を賣拂はしむ吾人は獨り娼妓の憫むべきを見る彼等の柔弱なる自ら其貞操を全うする能はず樓主に逼られ顧客に買はれて日夜に其人類たる資格を失墜す吾人は宗教の名に據りて薄弱なる女性を保庇し不倫なる法律を打破せんと欲す

存娼論者は曰く若し此制度を廢止するときは密賣淫到る處に行はれて惡疾の蔓衍は遂に種族を殘害するに至らん如かず其不倫のきはみなるも暫く之を許さんにはと是れ一を知りて二を知らざるの論也若し惡疾蔓衍の弊を恐れて不倫敗德を公許すと曰はゞ天下何の惡事か成し得ざらん竊盜も可なり詐僞も可なり殺人も可なり何となれば之を罰するによりて皆多少の弊害を生ずべければ也吾人は大に吾邦人の宗教心に乏しく社會制裁の力薄弱なるを嘆く娼妓を廢すれば惡疾蔓衍するか惡疾の蔓衍は人類の威嚴を毀損し人類の德操を蹂躙して而して之を拒がざるべからざるか吾人は寧ろ惡疾の大に蔓衍せんを

望む惡疾蔓衍して不倫敗德の人を一擊に打掃し去らんを望む娼妓を設けて種族の殘害を拒ぐと曰ふが如きは一時を綴縫せんとする姑息偷安の計に過ぎず吾人は道義の大原則をして自由自在に人生の上に潤歩せしめんと欲す社會的進化は物質上の優勝劣敗にあらずして精神上心靈上の優勝劣敗ならざるべからず即ち不倫敗德の人を陶汰して地獄に墮落せしむるは是無慈悲の業にあらずして人類全體の進歩のため却て大慈大悲たる所以也

且夫れ害毒を言はんか娼妓なるものあるがために青年子弟を墮落せしめ無垢の處女を殘殘ならしむ其弊實に言ふに忍びざるものあり況や風俗の嚴肅を紊亂し國家の恥辱を海外に暴露するにおいてをや得る所果して失ふ所を償ひ得て餘りありと云ふべきか吾人甚だ之を疑ふ

とに角娼妓の制は婦人の權利を蔑視して男子の隷屬となしたるものと謂はざるべからず其責固より男子の壓制に在りと雖我邦の婦人が這般非理非道の下に呻吟しながら敢て宗教の名に由りて之を排除するの勇なきは何の故ぞ吾人は全力を擧げて男子の不德を鳴らすを憚らずと雖亦婦人が此問題に對して冷然たるを怪しまずんばあらず男子の不義をなすを見て尚ほ之に默從するは決して婦德を全うする所以にあらざる也



吾人は次に監獄の囚徒を論じて本章を終らんとす

宗教は一切を擧げて悉く之を化度せんと欲す貴となく賤となく貧となく富となく善となく惡となく賢となく愚となく一切を網羅して普く之を救はんと欲すされど宗教は殊に罪惡あるものゝために慈悲の涙を灑がざるを得ず善人賢者は自ら道を知り自ら理を明らめて惡に陷いざらんと務むるなるべし只無智の細民に至りては窮すれば必ず

亂れ恆産なければ必ず恆心を失ふ是れ寧ろ憐むべきにあらずや故に宗教家は監獄の囚徒を教導して善心に翻へらしめんを要す

近頃或は犯罪を以て病理的となすものあり曰く彼等の頭腦は常人と異なれり一たび之を懲治するも彼等必ず之を再す是れ彼等が先天的に犯罪的腦髓を有すればならんと然り是れ或は事實ならん然れども骨相上の變化は先づ心理上に變化を起したる後ならざるべからず進化論は先づ官能ありて然る後其官能に相應する機器發達する所以を證明したり即ち手ありて始めて攫むにあらず足ありて始めて歩むにあらず先づ歩行力執捉力ありて而る後手を生じ足を生じたる也果して然らんには先づ犯罪心ありて而る後犯罪的頭腦を形成したるものと謂はざるべからず故に適當なる懲治法を以て犯罪者を精神上より物質上より救治せば必ず善に還らしめ得べからんか

犯罪を以て一種の狂癲となすは唯物論の結果なり而して倫理に在り



て宿命説即ち先天的運命を主張するもの也其弊や日に犯罪者の數を増加して吾人は監獄の費用に堪へざらんとするに至らん此の如くんば道德の進歩何の時にか期すべきぞ人生は只物質の器械的に運動するを見るのみにて何の自由なく何の責任なく何の進歩なきものとならんか是即ち人類進化の途上に一大障害物を横ふるものと謂ふべし

宗教は犯罪性の先天的なるを認めずたとひ多少の遺傳によりて犯罪せんとする傾向を示すものあるも決して救治し難しとはなすべからず

宗教は此くして一方に在りては囚徒を精神的に教化し他方に在りては之に適當の職業を與ふるの法を講ぜざるべからず犯罪の原因の大抵貧窮に在るは統計の明示する所德操なく教育なきものをして其身を犧牲にして善をなさしめんとするは到底不可能底の事にして又不可望底の事なり故に出獄後にして之に職業を與ふるの法なくんば復

竊盜をなし詐僞をなす愈巧に愈大なるものあらん事實は實に之を證明す悲心慈腸の宗教家たるもの豈に默過して止むべけんや

之を要するに宗教は社會的進化をして競爭に由らずして共同に由らしめんと欲す弱きを扶け愚なるを導き曲がれるを正して人類全體の進歩を期せんと欲す吾人は此に我邦の社會問題として見るべきもの二三に就きて宗教の意見を吐露したり其他尙論すべきものあれども宇宙的精神を基礎として之を解釋せば自ら宗教の本意を滿足すべし今詳說せず



## 第十五　宗教と國家との關係

國家と宗教とは一見甚だ衝突するが如くに思はるゝものなり何となれば國家は差別の上に建つものにして而して宗教は一切平等主義を取るものなればなり宗教は宇宙的理想を實行するを以て最後の目的となし國家は自國の存在を保維するを以て終局の目的となす宗教は全世界を打して渾一せんと欲し國家は各自個々に存在せんと欲す宗教は四海兄弟なり萬民同胞なりと敎へ國家は天上天下唯我のみ强大なるべしと曰ふ宗教は一視同仁自他の區別に執着せざれと說き國家は忠君愛國を主義として獨立獨存せよと主張す宗教は寧ろ國家の存立と歷史とを打破するを憚らず國家は常に自己の利益を中心として擧動せんとす此の如くにして宗教と國家とは殆んど兩立し難きの看をなす知らず宗教是なるか國家是なるか

試に目を擧げて現今世界萬國の實勢を看よ各蕞爾たる地球の一部分に一國なるものを建立して其土地を吾土地と稱へ其産物を吾産物と稱へ其人民を吾人民と稱へ若し各國間の私利的利害にして相容れざるものあるときは直に平和を破りて干戈を動かし人命を亡ぼし商業を中絶し殖産を沮遏し自他孰れか斃れずんば止まざる也而して彼等の文明なるや私利的利害の故を以て戰爭の口實となすを欲せず必ず や將に名を正義公道に假らんとす曰く吾彼を攻めんとするは東洋(又は西洋又は世界)の永遠の平和を維持せんとするがためなり曰く彼は吾權利を無視したり吾は正義の名において默する能はず曰くかの貧弱國の獨立を扶けて之を開明の域に導かんと欲すと其言ふ所を聞けば頗る理あり戰爭固より止むを得ずして起れるものゝ如に見ゆれども其眞相を剔抉し來れば何たる醜態ぞ只自國の私利を增大にして他國の勢力を殺がんとするに在る而已然れども是尚可なるものあり何



となれば其實相の如何を問はざるも尚正義を口實とするを得べければなりかの貧弱爲ずなきの國に至りては如何に其權利を蹂躪せらるゝも其平和を攪亂せらるゝも正義を無視せらるゝも恥辱を與へらるゝも彼は只怨を呑み憤を包みて屏息雌伏する而已亦奈何ともするなき也彼は正に正義を唱ふるの實あるもの也而かも只之を實行するの力なきが故に其名をだに假る能はず萬國公法の存在も是に至りては有名無實貧弱國のためには何の用をもなす能はざる也但武力の實あるものは非を是となし邪を正となし青天白日の下に在りて强盜掠奪を擅にす而かも亦之を呵責する能はざるに至りては各國對峙の弊實に極まれりと謂はざるべからず

然れども今や野蠻時代を去ること既に遠し其智は益〻巧に其才は益〻妙なり是を以て彼等は蠻民の如く一も二もなく直に勝敗を干戈に決せんとはせず先づ外交政畧なるものを施して樽俎の間に折衝せんとす

而して其所謂外交政略は一大詐僞の術也或は虛勢を張りて威赫し或は甘言を以て欺瞞し或は陰に同盟して陽に反目し或は表に哀を乞ひて裡に舌を吐く仔細に看來れば其術たるや虛々實々變々化々千態萬狀なりと雖畢竟するに孰れも權謀術數ならざるはなし而してかの鐵艦を太洋に浮べ巨礮を曠野に連ぬるが如きは譎詐百端の後到底術の盡くすべきなきを看るに至りて始めて然るを致す是乃ち萬止むを得ざるの餘に出づるものにして文明と野蠻との差別は蓋し此に在りて存する也故に一言を以て今日國際の關係を斷ずれば私利に始まりて無道に次ぎ困憊に終ると謂はざるべからず

嗚呼是實に今日萬國間の交際なるものなり以て其宗教の理想と相去る如何に遠きかを見るべし吾人は國家の成存の到底宗教と相容れざるものなるかを疑はずんばあらず



一方より見れば宗教と國家とは斷じて相兩立するものにあらず宗教は三界を以て吾有となし一切衆生を以て吾子となす啻に人類の平等なるを說くのみならず山河草木禽獸蟲魚の類を擧げて悉く同一の位地に措かんとす其國家が各自獨立して互に其權利を主張するの比にあらず加之國家の存立は人類の目的にあらずして手段なり人類が進化の途上において經過すべき一ステーションに過ぎざるなり人類は人類のために生存するものにして國家のためにするにあらずもし社會の進化にして必ずしも國家の組織を要せずとせば直に之を打破して一層善良なる關係を案出するも亦不可なかるべし果して然らんには宗教卽ち人類の理想希望を實行するに當りて國家の存在の却て之を防遏する如きことあらんには國家を改造するは當然の事なりと謂はざるべからず

然りと雖眼を全局の上に注ぎて宗教と國家との關係を觀察するとき

は此見解の大に偏屈なるを發見すべし先づ空間的に之を論ずるに平等のみありて差別なきは悪平等なり又差別のみありて平等なきは悪差別なり否平等は差別以外に在りて平等なる能はず差別は平等以外に在りて差別なる能はず差別にして而して能く平等に平等にして而して能く差別なり之を圓滿なる宗旨となす國家と宗教との關係も亦然り差別を主義とする國家ありて而して始めて平等の宗教を説くべく平等を目的とする宗教ありて而して始めて差別の國家を知るべし故に國家を捨てゝ宗教を説かんとすれば猶自家の存在を無にして他の存在をのみ是れ實となすが如く矛盾の嫌なき能はず思ふに個人の道德にして圓滿なるは我ありて而して我なき處に在り自利にして而して利他なる處に在り國家の生存も亦個人の生存の如し自國の生命を外にして他をのみ救はんとするは平等を知りて而して差別を知らざるもの又自國の利害をのみ是れ見て而して正義の何たるを論せざ



るは差別を知りて而して平等を知らざるもの兩ながら圓滿なりとは謂ふべからず故に是理によりて考ふれば宗教と國家とは必ず相待ちて始めて全きを得るものとなすべし

又之を時間の上より見るに國家の成立は社會進化の途上にあるものなるべし即ち人類が其生存の目的を實行せんがための方便なるべし然れども所謂る方法なるものにしてその目的を達するには是非とも一たび經過せざるべからざるものとせばたとひ此にして一時彼の實行に遠ざかるが如き現象を呈せんも吾人は之に依るより外なきなり何となれば其時其處の必要に應じて存在せざるべからざるものは其時其處において眞理なるを失はざればなり之を相對的眞理と曰ふ而かももと是れ自然の必要に由りて存在するものなれば絶對的眞理と其價値において何の差異かあるべき何れも眞理たる面目を具ふるに至りては吾人は皆之に遵はざるを得ざる也されは國家の存在は方便

なりと曰ふも亦能く眞理の片影たるが故に其處其時に應じては宗教の形式も亦多少の變更なかるべからず卽ち宗教は先づ國家の存在を維持せんことを計り又其歷史人情に隨順せんを要するなり

之を人類がなせる生物的進化の途程に譬へんか若し人類を以て其始めは猶「アメバ」の如く單細胞より成りしものとせば他時異日次第に進化して地上最高等の生物に發達すべき能力を有するも當時に在りては淤泥中に浮游して營養となるべき有機物を捕獲し未成の消化器にて之を同化したるならん而して其繁殖するや兩性獨立の存在をなさゞるが故に卵の受精する必要なく單に其體の中部において分裂して二個の細胞となりやがて又各自獨立の生涯を送りたるならん今日の人類を以て之を見れば「アメバ」的生涯の單純なる纔に生物と謂ふべきほどの活動を發現したるに過ぎざりしならんも吾人は之がために人類祖先の生活を以て不合理非眞理の擧作なりきとなす能はず吾人は



「アメバ」時代に在りては「アメバ」の如く生活するを以て最も宜しきに適へるものと信ず固より人類は「アメバ」的に止まるべくもあらざりしが故に漸次に進化發達して今日の如き靈妙の作用をなすべき可能性を具有せしに相違なく決して途程に迷ふ可もあらざりしならんと雖其當時に在りては實にしかせざるを得ざりしなり

又之を政體變遷の樣子に比せんに今封建時代を以て各國政體の發達上必ず一たび經過すべき制度とせば封建時代の理想的制度にあらざるは言ふまでもなしと雖此時代に處しては君臣相愛を以て第一の道義となさゞるべからず何となれば當時は君臣相愛の度如何に由りて其國の盛衰を來すべければなり固より君臣相愛は何れの時にありても美德なるは勿論なれども人類の道義はこれだけにて圓滿なるものにあらず況して封建時代破れて立憲自由の政體となれば德義の形相も亦一變すべきにおいてをや但封建時代に在りては一日も是德なか

るべからざりしなり

そは兎に角たとひ吾人は今日社會將來の進歩は如何なる形態を取るべきかを知らざるにせよ又或る學者の說く如く宇內混一の大團體となり行くにせよ到底今日の如く各國相對峙して競爭するを以て圓滿究竟の理想となす能はざるは皆人の許す所ならんしかも此の如しと雖今日に在りては今日の如く行はざる可らず卽ち國家の進運を計り得べき一切の事業は悉く之を爲さゞるべからざるは上來述ぶる所にて充分明ならん但今日の國家は圓滿なる目的にあらざることを知りて常に之が改善を期しなば則ち可ならんか是れ實に宗教の本領とする所也宗教は決して國家の基礎を顚覆して新組織をなさんとするものにあらず國家の成立歷史に隨順して而して之が進歩發達を計らんとする而已



由是觀之宗教と國家とは決して衝突するものにあらず兩者相待ち相助けて始めて完全を期するものと謂ふべし但今日の國際道德に至りては尙蠻民の臭味を免かれず從つて宗教の理想に乖く大なりと雖而も彼尙正義人道を口にするを見れば其中心一片の道念なきにあらざるを知る而して宗教は實に此道念の裡より發芽せしめざるべからず

さらば如何にして發芽せしめんか

既に宗教は國家を體として存すべく國家は宗教を精神として發達すべしとせば此問題を解釋するは容易の事也何ぞや曰く宗教と國家とを渾一する是のみ卽ち國家の一擧一動をして宗教的ならしめ宗教の一言一行をして國家的ならしめば國家のためにするは卽ち宗教のためにするなり宗教のためにするは卽ち國家のためにするなり二にして一一にして二差別にして平等平等にして差別圓融化合宗教と國家と毫釐の間隔を存せざるに至らんか

先づ之を國際の道義に見れば兵を養ひ武を練るは他國を侵略して其權利自由を奪却せんとするにあらず但自國の存在をして邪魔外道の侵す所とならしめざるに在るのみ巨艦を造り大礮を鑄るは徒に私利を擴張して他の福益を蹂躙せんとするにあらず但自家の歴史をして不義無道の亂す所とならしめざるに在るのみ商業を營み殖産を務むるは物質的財力を積蓄して他國を壓伏せんとするにあらず但此に由りて益人智を發育せしめ道德を圓滿せんとするに在るのみ故に暴國あり來りて吾商業を妨害し吾權利を蹂躙せば是直に人類全體の進歩を中絶せしめんとするもの吾國は宗教の名に由りて之に服從すること能はず是においてか已むを得ずして干戈を動かす敢て敵人を屠らんとするにあらず敢て城地を掠めんとするにあらず敢て財寶を奪はんとするにあらず但正義の爲めに不正を代表せる民國を懲さんとするのみ吾豈に何の求むる所あらんや是之を宗教的擧動と曰ふ國家にして常に此道念を失ふことなくんば人類の進歩宇宙的理想の實行は一歩々々に期せらるゝと謂はざるべからず



個人の國家に對する道德も亦然り平時に在りては或は農業に或は工業に或は商業に或は學術に或は技藝に汲々乎として日に月に其發達を計る而して皆悉く人間全體の進歩を以て目的となすことをわすれず是之を平時の宗教と云ふ而して其一たび外國と釁を開くに當りて海兵は水に戰ひ陸兵は野に鬪ふ劍花閃き砲煙漲るの間に在りて縱横馳騁命を鴻毛の輕きに比して義を泰山の重きに見る只斃れて已むを期せんのみ是之を有事の時の宗教と謂ふ必ずしも神と云ひ佛と云ふを以て宗教となさず其職に在りて其責に任じなば天下何ものか能く之より宗教的なるあらんや

上來述ぶる所を約言するに宗教と國家との關係は一方より見れば差

別と平等との關係にして而して又一方より見れば手段と目的との關係なり今日の國際の道義は野蠻時代に於ける個人間の樣子に似て到底宗教と相一致する能はず而かも幸に一点の道光ありて其間に微かに輝くを見るが故に宗教は此よりして進み入らんを要す個人が國家に對する行爲は苟もその國家の進運卽ち人類の進歩を利するものならんには悉く宗教の本旨に合へるものと謂ふべし自利々他の原則は啻に個人間に在りてのみ遵守せらるべき道義にあらず萬國交際の上に在りても亦能く抱持せらるべき主義なりとす



## 第十六　宗教と家庭

宗教の最も密接なる關係を有すべき所は家庭に在り而して其最も有力なる影響を及ぼすべき所も亦家庭に在り家庭の集合して一國となれるものを國家と曰ふ國家の盛衰は家庭における宗教的思想の健否に由る迷信妄想の家庭を支配するあらんには國家の進運は直に阻害せらるべく無宗教思想の家庭を蹂躙するあらんには國家の活氣は直に枯衰し了らん而して家々皆篤信敬虔の風を存して道念堅固に信心決定ならんには國家の風紀自ら嚴肅に國民の道德自ら健全にして其國の進運は旭日の曈々として昇るが如くならん一家の風儀は一鄕の風儀を化し一鄕の風儀は一國の風儀を化し一國の風儀は天下の風儀を化す故に宗教は先づ家庭を感化せざるべからず

宗教の本務は必ずしも死者のために經呪を諷誦し引導を授與するにあらず死者をして死者を葬らしめよ過ぎたるものは逐ふべくもあら

ず宗教の要は寧ろ生者に在り生者をして眞理の福音に隨喜せしむるに在りそれ停滯不動は死せるなり保守退嬰は亡びたるなり宗教の活面目は人々の脚跟下に在りて轉轉々地なり豈に停滯不動なるべけんや保守退嬰なるべけんや吾人は宗教を以てたゝ亡者の靈魂のために未來の冥福を祈るものとなす能はず況んやかの靈魂は死後忽ち肉體を去りて宙宇に迷ふものにあらずして直に後進子孫の胸中に再現するものなるに於てをや吾人は世人の所謂る亡魂なるものゝ爲めに煩慮するを須ゐず只當に子孫の胸中に宿るべき不生不滅の精神を開發進歩せしむべきのみ

宗教の家庭における固より死者のために誦經するを妨げずと雖殊に生者の伴侶たるを期せざるべからず即ち婚姻の筵にも入るべく出産の蓐をも訪ふべく幼兒の教育にも干渉すべし吾人は此の如くにして宗教を隨處に活現せしめんと欲す宗教家は或は曰はん宗教は神聖なり出世間なり這般在俗の風習に立ち入りて何かせん宗教は寧ろ超然として俗塵に瀆されざらんを要す若し家庭にいらんと欲せば一家を擧げて朝夕神佛の前に禮拜せしめよ寺院の説法に參せしめよ精進潔齋せしめよ十字架をとり珠數を爪繰らしめよ經文を暗誦せしめよ乞食に施食せしめよ宗教は是にて足らんと何ぞそれ思はざるの甚しきや此の如きは宗教を以て死物となすなり人類の進歩道德の實行に遠ざからしむるなり大信仰大安心大希望は決して此の如き宗教に因りて得らるべきにあらず



吾人は宗教を以て婚姻にも與かれ出産にも與かれと曰ふ何となれば婚姻の如き出産の如き皆嚴肅なる宗教的意義を有するものなれば也婚姻は人類の生命をして不生不滅ならしめ靈性の進化をして無窮に發達せしむ故に婚姻は個人的生涯を離れて別に宇宙的生涯あるを覺知するの初歩なり自然が青年男女に戀愛の熱情を附與したるは決し

て之を濫用せよとの意にあらず宗教的思想を以て之を正路に向はしめんがためなりさらば宗教の婚姻に伴ふことなくんば其弊や禽獸の所行を去る幾何ぞ婚姻は快樂にあらず義務なり決して一時の情念に任せて或は合ひ或は離るゝが如きを許さず必ずや嚴肅なる宗教的思想を以て之を牽制せんを要す

婚姻は神聖なり精神的なり人生の一大事なり吾人が永代の祖先に對し永代の子孫に對して嚴肅なる宗教的義務を果す所以也過去の過去際より綿々として傳り來れる宇宙の生命は婚姻を待ちて始めて又未來の未來際に相續す祖先が蓄積したる寶庫を更に增益して究竟圓滿の域に達せしめんと欲せば斷じて婚姻を以て無意義のものとなすべきにあらず男女の生理的關係は婚姻の眞相にあらずして形骸なり主者にあらずして伴者なり猶腦髓の意識におけるが如し腦細胞の化學作用は心意活動に伴隨して生ずと雖心意活動は腦細胞より逃出し來



るにあらず只兩者の相一致して發動するを見るのみ若し男女相愛の動機にして生理的感動より發し來るとなさば人間の靈性的なる所以は亡びて久しと謂はざるべからず

出產は婚姻の實にせられたる也出產なき婚姻は空式に過ぎず必ず之を塡充せんを要す何となれば婚姻の目的は兩靈性の結合によりて更に新靈性を擧げんとするにあれば也故に婚姻の宗教的に結ばれざるべからざる如く出產も亦宗教的に祝せられざるべからず是に於てか人類の人類たる所以は其肉體の如何にあらずして其靈性にあるの理愈明ならん

婚姻既に宗教的なりとせば夫の婦に對するは强者の弱者に對し優者の劣者に對するが如くなるべからず夫は當に婦の權利を重んずべし只管自己の快樂を買はんため婦の個人的權利を侵害するが如きは不倫の甚しきものと曰ふべし基督は他の婦人を見て情を動すは既に心

に姦淫したるなりと云へども吾人は自己の妻子に對して非禮の所行あるも之を邪淫となすを憚らず佛陀は不邪淫戒にて審に之を戒しめたり婚姻にして男女が生理的情欲を滿足せんがため結ばれたるものとせば人類社會は禽獸の群に墮落したるなり禽獸は尙可なり彼等は宇宙の原則を識らず只自然力の內より迫迫するに會うて無意識に之を爲す耳彼等は沒道理なり人類の道を以て可否すべきにあらずされど人間に在りては明に天地を自覺し自己を自覺し宇宙の道理を自覺す是故に人類には自由あり責任あり義務あり其爲す所に對して道德的責務を負はざるべからず而してかの快樂主義なるものは全然之を無視し去らんとするの傾向を存す彼等にして一たび失脚せんか或は人類の資格を滅絕するまでに沈淪せんも圖られざるなり

家庭は夫婦より始まる夫婦の道にして治まらば人類の前途亦憂ふべきなし夫固より其强を挾んで婦の權利を輕んずべからずと雖婦亦人



類のために貞節を破るの敗德をなすべからず思ふに婦德の最も大なるは其貞節に在り貞節にして一たび破らば萬事休す豈啻婦人一個の德を損ずるのみならんや人類の威嚴は直に地に墮ちて禍藥必ず子孫に及ばん

由是觀之婚姻なるものは一部の宗教家が所謂る俗事にはあらざる也否神佛に供養するよりも精進潔齋するよりも一層宗教的意義あり曰はざるべからず若し宗教を以て出世間的信仰なりと曰はゞ宗教は閑人の閑事業たるを以て滿足すべし蓋し宗教は人道を離れて獨立するものにあらず人道は宗教を離れて孤存するものにあらず出世間と曰ひ世間と曰ふは只方便のために區分たるのみ宗教の精神は決して兩極に偏せず世間卽是れ出世間なり出世間卽是れ世間たり故に佛者は曰く王法と佛法とは一也又曰く治生產業皆實相と違背せずと近眼者流或曰く此の如くんば宗教の尊嚴を損する甚しと謂ふべしと

大なるかな其誤るや宗教は世間を離れて獨り尊嚴ならんと欲するか而して世間をして獨り其汚濁なるに任せんと欲するか宗教は世間を して直に尊嚴ならしめんとは欲せざるか超然的宗教は人類の進歩に關はらずと云はざるべからず吾人の要する所は地上に濶歩横行せんとするに在りかの鴿鳥の青雲を淺きて翺翔する如きは人類の事にあらず人類は須らく人道を踏着すべし天神の所爲を學ばんとして却て落下せば其醜や更に甚しきものあらん

婚姻に附帶して論ずべきは一夫一婦の制なり吾人は人類を以て必ず是制を遵守すべきものとなす何となれば一夫一婦の制は最も能く婚姻の目的に適合したるものなればなり即ち最も健全なる新鑒性の生命を呼び來すこと一夫多妻多夫一妻の制に比して遙に優るものなればなり多夫一妻は蠻族の制なり文明進歩の光は到底這裡より放射し來るものにあらず故に今日文明諸國には一も此制に由れるものなし



一夫多妻の制に至りては尚社會の一部に存せるを見る即我國の所謂る上流社會の如き正妻の外に多少の婢妾なるものを養へり是を以て世人往々一夫多妻主義を以て理あるが如くに思へども是れ大に然らず一夫多妻の制は啻に生理上子孫繼續のため有効なるものにあらざるのみならず婦人の品位を墮落し(殊に婢妾に在りては此弊言ふに忍びず)婚姻の神聖を汚瀆し又人をして快樂のために婚姻せしむるの誘因となる加之一夫多妻の制は家庭の平和を亂し國家の元氣を損する實に甚しきは我國封建時代の大名騒動なるもの及び今日市井間の紛擾を見ば直に會得せらるべきなり故に吾人は一夫多妻の制を以て人類進化に害あるもの即ち不道義なるものとなすを憚らず是亦宗教的制裁を以て防遏するにあらざれば人類の威嚴地を掃ふて空しきに至らん

宗教と家庭との關係既に此の如し我國現今の婚姻果して宗教的なるを得るか家庭は果して宗教的空氣を呼吸しつゝあるか嗚呼吾人は不幸にして否定的文句を以て之に答へざるを得ざる也是一は我邦從來の宗教家の失錯に由り一は吾國民の嚴肅なる宗教的思想を缺くに由る

下等社會は無教育なり之を責むるに嚴正なる道義を以てするは酷に失す蓋し責任は自由に伴ふ自由を享有すること愈多ければ其責任も亦愈大ならざるを得ず充分の教育を受くるの資財あり充分の道德を行ふの餘裕あり而して不倫敗德を行をなさば吾人は當に大に鼓を鳴らして之を訶責せざるべからず故に吾人は全力を竭くして我邦の中等以上の人民を責めんと欲す殊に上等社會の風儀を責めんと欲す吾人は彼等が事實なりとは思はれぬ不倫敗德の所行をなして而かも靦然たるを見るごとに大に慨歎せざるを得ざるなり



宗教の眼中には人爲的階級なし大臣宰相と雖其道念に缺くる所あらば吾人は彼等を以て餓鬼畜生となすを憚らず乞食の徒と雖其德全きものあらば吾人は彼を以て菩薩の化身となすを厭はず宗教家の眼孔は大に世人に異なれり下流社會は一小善あるも大に賞揚せざるべからず上流社會は一小惡あるも大に貶黜せざるべからず吾人は我邦の貴族にして市井の賤女を近づけ無垢の婦人を傷ひ蓄妾し賭博するを見聞する屢なるに驚く是固より我國民全體の沒道念なるを反映するものなるべしと雖皇室の藩屏と稱する貴族の名において餓鬼畜生的所行をなすを詰責せずんばあらず

才學あり膽畧あり利巧あり辯聰あるも未だ以て上根機となすに足らず宗教は只大信仰大道念を有せんことを要するのみ才智多きものは無明も亦多く利巧大なるものは詐僞も亦大なり而して世人の妄なるや此の如きものを以て上乘の人間なりと信じ其前に叩頭三拜して感

喜の涙に咽ばんとす甚だ憫むべき也

是に於てか吾人は宗教の大に我國民の家庭殊に貴族社會の家庭に入らんことを望むや頗る切矣何ぞや貴族の境遇は中等一般の境遇よりも更に憐れむべきものなれば也看よ言ふ所聞かれ思ふ所行はるゝは即ち人をして益〻墮落に導びく所以にあらずや語に曰く逆境は打し易く順境は打し難しと貴族は打し難き順境に處するものなり彼等の隣人は惡魔なり否惡魔の手は常に彼等の頸に懸れり彼等にして寸毫の油斷あらば直に之を拉し去りて奈落の底に陷擠す而して彼等の愚なる之を以て無上の快樂となす殊に知らず其心と其身と次第々々に腐蝕せられて限りなき亡びに至らんとするを故に宗教家は貧民のために布教傳道を怠らざるが如く貴族のためにも眞理の福音を傳へざるべからず



又我國今日の宗教を見るに維新以來基教の新に傳播するや先づ青年男女に傳道し又家庭に入らんと勉めたるを以て基教徒の家庭は概して敬虔篤信の美風を存せり是最も喜ぶべしとなす但佛教に在りては家庭との關係左ほどに目覺しからず迷信者は只珠數を爪繰りて「南無阿彌陀佛」を唱ふるのみ佛教を以て一種出世間的のものとなしたるの弊は今や益〻僧侶をして家庭に遠ざからしめんとす素と僧侶の家を出でゝ叢林に入りたる所以は菩薩の四大誓願を成せんがためにあらずや知るべし僧侶の事業は自ら潔うするにあらずして世を擧げて救はんとするにあるを又知るべし僧侶の目的は山林寂寞の地に眼目枯坐するにあらずして紅塵鬧市の裡に入り灰頭土面にして人を度せんとするにあるをさらば佛教の本領は塵俗を離るゝにあらずして塵俗に入るに在りと曰ふべし僧侶は須らく從來の方針を一變して青年男女に布教し上下の家庭に入りて活潑潑地に運動せざるべからず乃ち婚

姻にもあづかれよ出産にもあづかれよ死者のために經をよまば生者のためにも法を說けよ基敎にもあれ佛敎にもあれ健全なる宗敎的思想にして家庭を支配するにあらずんば我邦の前途實に危險なりと謂はざるべからず

新宗敎論　大尾

明治廿九年十一月二十日印刷
明治廿九年十一月廿五日發行

版權所有

新宗敎論奥附
金三拾錢

著作者　石川縣金澤市川岸町八番地　鈴木貞太郎
發行者　京都市上京區木屋町通二條東生洲町十一番戸　河村泰太郎
印刷者　京都市室町通四條下ル鶴鉾町第十二番戸　大森幾治郎
印刷所　京都市柳馬場二條下ル等持寺町第十番戸　京都印刷株式會社
發行所　京都市木屋町二條　貝葉書院

京都市木屋町二條 貝葉書院

佛教各宗派管長題字　蘆津實全師序文　嶋地默雷師跋

# 佛教各宗協會御編纂
# 各宗派本山御校閲濟

## 佛教各宗綱要

日本紙摺和裝
顔美本全五冊
正價金壹圓卅錢
郵送費金拾八錢

破天荒空前絶後の一大出版として佛教十二宗の活歴史活法門を網羅し一大氣焰を放ち方今世上に宗教の一大問題となりて甲論乙駁爭の度極まりて遂に法庭の制裁を仰ぐに至りたる者は即ち本書なり如何に本書が佛教界の勢力をして社會を震動せしむるの良書たるの味を知らんと欲するの士は速に一本を坐右に供し玉へ

禪宗諸大德題字序文

校訂
箋註
# 禪門法語全集

自第六篇
至第十篇
正價金前篇同樣

●每月一冊發行○全部發行迄に購讀申込の方は特別割引前金七拾五錢郵送費貳拾錢○既刊前篇五冊と合せて（拾冊）特別前金壹圓五拾錢郵送費四拾錢とす

玄の又玄妙の又妙なるものは即ち禪也能く一切の恐怖を除き能く一切の塵念を坐斷し以て人に最も大なる安心を與ふる者は即ち禪也此故に宇宙の妙機を諦はんとするの文學家死生不二の決定を要する軍人に在ては特に禪學を修むるの必要ありとす弊院曩きに前篇五冊を發行したるに頗る天下の好評を博したり然るに古大德の法語は頗る多く前五冊に網羅し能はず仍て今回更に六篇より十篇迄を發行することゝなれり今や其第八編を發刊せり苟も斯道に志あるの士は是非一本を坐右に供せられたし

校訂箋註禪門法語全集總目

●第一編○前天龍管長由利滴水師題字○目次　聖一國師法語、大應國師法語、大燈國師法語、盤山假名法語、遠羅天釜●第二篇○建仁管長竹田默雷師題字、圓覺管長釋宗演師序文○目次　遠羅天釜續集、さし藻草、反故集、莫妄想●第三編○鴻儒富岡鐵齋居士序文○目次　正法眼藏隨聞記、麓草分、快馬鞭●第四編○建長管長霄貫道師題字、東福管長、濟門敬冲師題字○目次　二十三問答、盤山和泥台水集、不動智神妙錄、寶鏡窟之記●第五編○妙心管長關無學師題字、大德前管長管廣州師題字○目次　枯木集、霧海南針、大道和尚法語、無難禪師法語、●第六編○南禪管長豐田毒湛師題字　同派大德長山虎乬師題字○目次　光明藏三昧、夢の記、月庵和尚法語、澤庵和尚法語、三身四智辯、夜船閑話、施行歌、安心はこりたゝ記、教訓雀噺說●第七編○前南禪管長松山舜應師題字○目次　澤庵和尚の玲瓏隨筆

三井長吏山科祐玉師題字
叡山探題中山大僧正題字
天台座主村田寂順師序文
日蓮宗管長小林日董師序文

# 法華玄義釋籤講述

天台老僧大寶大和尚著

日本紙摺和裝
合本全拾五冊
正價金五圓
郵送費金卅四錢

抑天台宗三大部末疏の世に流布せるもの尠からず然れども概して皆偏にして正ならず謂ゆる三諦の空假を取りて圓融の妙理中道を得たる晋に至ては殆んど之を求むべからず故に大寶大和尚深く之を憂ひ諸末疏の長を取り短を補ひ且つ難解難入の文字は悉く其義理を詳解し以て大に後學に便渠を與へられたることは夙に斯學に志すものゝ知らるゝ所なり然れども此疏未だ梓に上らずして廣く世に流布するに至らず是を以て弊院は之を遺憾とし今回斯學大家の校閲を經て發刊することゝなれり乞ふ大方の諸士振つて購求せられんことを

# 禪宗

毎月一回發行第二十號迄既刊
一部定價金七錢全國無遞送料

禪門唯一の好雜誌として世上の評鑑を博したる禪宗は今や第廿一號を發兌するの盛運に會しぬ元來本紙は禪定窟の發行なりしも其第廿號より弊院發行することゝなり就ては其第廿一號より紙面の大改良を計り頁數も十頁以上を增加し臨濟宗各御本山の錄事は細大洩さず而して其社說の如何に雄渾に其論說の如何に典麗に其雜錄、詞苑、雜俎の諸欄の文字の如何に光彩あるかは弊院の豫告を須ひざる所なり

天台座主大僧正村田寂順師題字
前相國管長荻野獨園師題字　比叡山僧正蘆津實全師著述

# 四恩綱宗

和裝日本紙摺全一冊
正價金貳拾錢郵送貳錢

眼を放つて世界を見よ、今や本邦の大問題たる內地雜居の期も、日一日より近づきて、彼白哲人種と比隣の交際を爲さんとするに非ずや、吾人大和民族の大覺悟なかるべからざるなり曰く宗敎の衝突、曰く人種の競爭、曰く道德の相異等、彼此混雜縱橫錯綜して、愈石火電光の世界は、繁劇を加へ、東西交通の活路を開くに至れば、其相狀復た今日の比に非ざるを知らるべし、之に對する覺悟は如何、我が大日本大和民族の團體を堅固にして、以て外人に當らざるべからず、爰に於てか四恩綱宗は世に顯はれたり、該書は比叡山慧日院の僧正蘆津實全師が四恩會員の爲め多年心血を絞りて說破せられし、大乘心地觀經の四恩、父母衆生、國王、三寶の大功德を講述せられたる、大綱宗要を雄渾勁拔なる筆鋒を磨して。著述せられたる者なり。卷を繙けば。四恩の深義は、紙上に溢れて、就中我が大和民族が精神とする所の忠孝の大道及び佛敎心地の道德を審かに說示し、以て內地雜居の豫防に備へたる一大著述なれば、有志者は必讀せざるべからざるの良書なり

013673-000-9

68-469

新宗教論

鈴木　大拙／著

M29

ABA-0143